

『信州大自然紀行』が進行中

富樫 均

昨年度から4ヶ年計画で「長野県の地学・*地文（ちもん）遺産の活用とエコツーリズムに関する調査研究」に取り組んでいます。この研究は、信州の自然環境を縁の下で支えてくれている地形や地質、あるいは自然の歴史に注目して、それらの魅力や意味を広くたくさんの人に伝えてゆくことを目的にしています。そのための基本情報の整備と、エコツーリズムへの活用をはかっていきます。エコツーリズムというのは、自然をまもりながら、自然などの魅力を深く味わってもらうための新しい観光スタイルで、県内でも少しずつその取り組みが増えていきます。

長野県には起伏に富んだ地形や、日本列島を縮図にした多種多様な地質があります。これらは、地域の風土や生物多様性を支える大切な環境の要素です。けれども、これまで地形や地質というのは、遠くから眺めたりはするけれど、触ったり、その歴史的な意味を考えたりということはあまり一般的なことではありませんでした。むしろ石や土を見て喜ぶのは、ちょっと変わった人というイメージさえあったようです。自然観察会でも、鳥や植物などの観察にくらべて、地形や地質をテーマにした観察はわずかの機会しかありませんでした。これまで地学現象については、一部の専門家によって難しそうに語られることが多すぎたのかも知れません。ただし2000年以降、日本国内でも「ジオパーク（中国訳：地質公園）」という言葉が聞かれるようになり、地形や地質あるいは地球をテーマに、観光と結びついた地域おこしに取り組む活動が関心をあつめるようになってきました。県内でも、南アルプス中央構造線エリアが日本ジオパークになっています。



赤石山脈の塩見岳：中生代白亜紀の頃の海洋底の岩石からなる

この調査研究では、一定の基準を定めて、県内各地にみられる代表的な地学遺産を記録しています。その調査に加えて、今年の春から調査の途中で見たことや感じたことを、ブログを通して紹介していくことにしました。それが、題して『信州大自然紀行』です。なるべく肩のこらない短い文章で、1～2枚程度の写真とともにご紹介し、最後に一句を添えるようにしています。ときに雄大な景色を、ときには小さな花をうたいます。たとえば赤石山脈（南アルプス）の塩見岳は、中生代白亜紀の頃に海洋底をつくっていた火山岩やチャートが、その後の地殻変動によって3000mに達する山の頂に姿を表したものであるという風に説明しています。なぜ一句か、というと、たとえしょぼい句でも、印象に残った体験を心から心へ伝えるのに少しは役に立つのではとの期待があるからです。ただし、句を考え出すと仕事がおろそかになる恐れがあるので、句作は勤務時間外にするように気をつけています。

もしインターネットをお使いでしたら、お暇なときにでも下記のブログを覗いてみてください。
URL <http://nature.nagano-ken.jp/c359.html>
「信州大自然紀行」と検索していただいても、すぐに見られることと思います。



入笠山にて
～くすくすとすずらん笑ふ山の風～

注）*地文（ちもん）：大地の状態のこと、「地文学」は地球を包む気圏・水圏や地球上に起こる諸現象、自然と人間との相互関連等について幅広く研究する分野のことで、「天文学」と対になることばです。